

# 教職実践演習履修カルテ作成支援のための振り返り活動

下木戸 隆司 [鹿児島大学教育学系 (心理学)]

## Reflection activities for a “Teacher Training Course Progress Chart”

SHIMOKIDO Takashi

キーワード：教職実践演習、履修カルテ、自己省察、教師の資質能力、キャリア形成

### 1. はじめに

2009年に改正された教育職員免許法施行規則では、教職課程の質的水準の向上という名目から、大学の教職課程に対して新たに教職実践演習が必修科目として設置された。またその際、「学びの軌跡の集大成」として履修カルテの作成が義務づけられたのは周知のとおりである。

履修カルテには、文科省の例示に従い、教職関連科目の履修状況、自己評価シートの2本立てで構成・実施しているところが多いように見受けられる。鹿児島大学教育学部でも、カルテ1：履修履歴カード、カルテ2：教員としての資質能力自己評価カードとを作成することになっている。履修カルテ作成は4年次後期の教職実践演習を履修するための要件になっていることで、多くの学生がやり方もよくわからないまま記入しているのが実情であろう。

履修カルテは本来の趣旨からしても、ただ機械的に作成しさえすればよいというものではなく、学生自身が自らの活動や経験の効用や課題を自分なりに解釈し、意味づけることが必要である。では、そのためにどのような環境を整え、それをどう運用していけばよいのだろうか。

### 2. 直近4カ年における卒業生の教員就職率

教員免許状を取得しようという学生は、教職課程で学んだことや身につけた力などを、学びの軌跡として履修カルテに記載していくことが求められている。しかし自己省察に不慣れな者も多いため、学生が独力で履修カルテ作成をこなしていくのは実際にはなかなか難しい。

心理学専修では2011年から、半期ごとに学生を集めて「振り返り活動」と称する履修カルテ作成のための支援活動を実施している。ワークシートを用いたエクササイズやグループ活動をとおし、学生が大学で学んだこと、身につけたこと、これから挑戦してみたいことなどを振り返り、自己省察の視点や方法について習熟するとともに、自己や自らの生活及び人生について理解を深めていくことを期待している。活動開始から4年以上が経過したこともあり、振り返り活動の教育的効果について吟味することは有用であろう。その際の評価規準や観点には様々なものが考えられるが、さしあたって本稿では、振り返り活動が学生の教職への志向・意識づけにどのように寄与していたをみるため、卒業生の教員就職率という観点から分析する。

文科省(2011, 2012, 2013, 2014, 2015)が報告している2011年度～2014年度卒業者の鹿児島

大学教育学部（以下、教育学部と略記する）及び国立44教員養成大学・学部全体（以下、教員養成系合計と称す）の教員就職率と比較するため、鹿兒島大学教育学部学校教員養成課程心理学専修（以下、心理学専修と略記する）卒業者の教員就職率を算出した。その際、文科省の報告に倣い、心理学専修の卒業者の値は卒業の次年度の9月30日時点のものを記し、教員採用率の計算には国公私立の幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校および特別支援学校の教員正規採用数と臨時的任用数を心理学専修の学生数から進学者・保育士を省いた者の数で除したものをを用いた。その結果を表1に示す。心理学専修の卒業生の教員採用率は、2011年度が25.0%、2012年度が47.1%、2013年度が33.3%、2014年度が63.6%であった。当初、教育学部や教員養成系合計の数値と比べかなり低調だったものが、その後上昇傾向を示し、とくに2014年度では教育学部の値を上回り、教員養成系合計の数値に迫っていることが見て取れる。なお2015年度については、まだ学生が在学中であるため教員就職率の計算から除外したが、原稿執筆時点で教員正規採用者が6名いる他、臨時的任用教員・非常勤講師希望が4名おり、2016年9月時点では直近2年と同等かそれ以上の値を示すものと予想される。

心理学専修では、振り返り活動を2011年から実施しているが、教育職員免許法施行規則改正に伴い教職実践演習の履修を義務づけられた学生を対象としているため、2011年度・2012年度の卒業者は振り返り活動を経験していない。つまり教員就職率の上昇傾向と振り返り活動の実施とがリンクするかたちとなっている。

もちろん、こうした年次ごとの変動には卒業者のコホートや社会情勢の違い等も含まれるために、振り返り活動の効果が教員就職率の増加にどこまで反映しているかを特定することは困難である。ただ少なくとも振り返り活動が、学生の教職志向の妨げになっていることを示すものではないといえよう。また明確なエビデンスとして示すことはできないものの、卒業者のなかには「振り返り活動で、自分のことや進路のことを考えた」「よい経験になった」「自分の身になっていると思う」などという感想を述べる者もあり、振り返り活動が自己理解や進路選択、キャリア形成のための機会を学生に提供していることに関して、一定の評価はできるのではないだろうか。

### 3. 心理学専修における振り返り活動の現状

心理学専修で実施している振り返り活動は、半期ごとに1～3年の各学年に対し3時間ずつの時間を設けて、当該期の成績発表直後に実施している。活動内容は各回によって多少変化するものの、

表1 直近4カ年における心理学専修卒業者の教員就職率

	心理学専修	教育学部	教員養成系合計
2011年度	25.0%	55.8%	70.8%
2012年度	47.1%	51.1%	70.1%
2013年度	<u>33.3%</u>	44.0%	69.0%
2014年度	<u>63.6%</u>	46.4%	68.7%

下線は振り返り活動を経験していることを示す

図1に示すように、①自己チェック項目への記入、②エクササイズ1、③エクササイズ2、④今期の反省と次学期の時間割づくりという手順で構成されることが多い。①自己チェック項目への記入、④今期の反省と次学期の時間割づくりについては、学生の変化が把握できるように固定化している。自己チェックとして記入する項目としては、卒業後の進路、当該期の学業成績や学生生活の自己評価、ジェネリックスキル（汎用的技能）についての自己評価などが含まれている。ジェネリックスキルについては、履修カルテが教員の資質能力を自己評価するものであることを考慮して、大学や社会でうまくやっていくために必要とされる力という、より広い意味あいでの自己評価することを意図して設けている。また次学期の時間割を作成する活動を取り入れ、互いの履修計画を見せあい、相談できる場を設定することは、大学のカリキュラムにさほど精通していない学生にとっては非常に有用である。

②エクササイズ1と③エクササイズ2については、学年や実施時期を考慮して随時内容を入れ替えている。例えば、2012年に2年生に対し実施した振り返り活動では、エクササイズ1として「私が頑張ったこと！」を、エクササイズ2として「How much time do you spend?」を実施した（図1参照）。「私が頑張ったこと！」では、各自が人生のなかで頑張った・成し遂げたと感じる事柄を列挙させ、それらを順位づけ、グループのなかで発表し、話しあうという活動を行った。自らが経験したことを捉え直し、現在や将来の生活のなかでどのように意味づけ、位置づけるかを考えることで、自らの価値観や判断基準の自覚が促される。重要なのは、それらが進路選択やキャリア選択の際の拠り所（キャリア・アンカー）になり得るからである（Schein, 1990）。また「How much time do you spend?」では、各自が当該期で従事してきた活動（例：課題学習、サークル活動、アルバイトなど）を1週間あたりの時間に置き換えて、それらに費やしてきた時間を見直すという時間管理の活動を行った。活動をみていて驚かされるのは、普段自分がどのくらいアルバイトや余暇活動に時間を消費しているかを自覚していない者が意外と多いという点である。とくにそのような学生にとって、多くの社会人が用いている時間管理の方法を知り、在学中からそれに習熟しておくことは有用だろう。

振り返り活動で配布・使用したワークシートは、未記入箇所への記入を促した上で、後日提出を求めている。提出されたワークシートに教員が目を通し、修学や進路についての指導相談の参考資料として用いることを意図してのことである。最近では、使用したワークシートだけでなく当該期の成績表、紙に印刷した履修カルテなどをバインダーに綴じて保管・提出するように求めており、ポートフォリオとしての機能を持たせている。

#### 4. 振り返り活動の課題と今後の展望

次に、振り返り活動を継続実施してきたことで見えてきた課題や問題点について論じる。それは、大別すると以下ようになる。(1) どのタイミングで振り返り活動を実施するか、(2) 振り返り活動の効果を高めるために、どういう体制で実施するのが有益か、以上2点である。

##### (1) 実施時期の問題

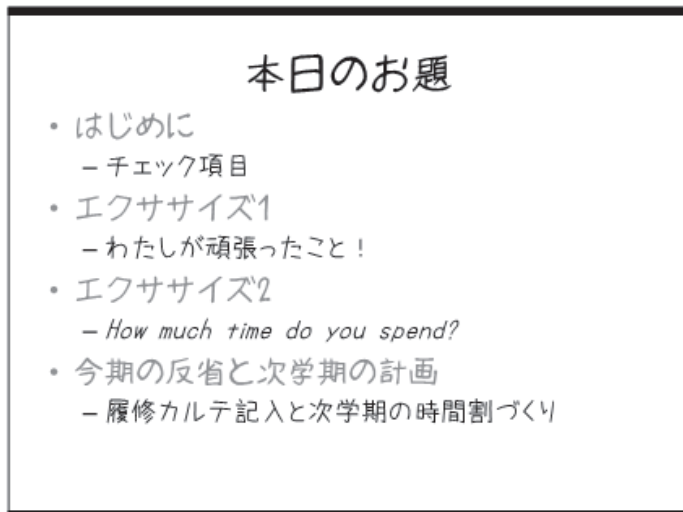


図1 振り返り活動で実施した内容の例

振り返り活動の実施日をいつにするかは、なかなか厄介な問題である。学期ごとの反省という点では、当該期の成績発表後から、次学期の履修登録前の期日に行うのが望ましいといえよう。成績発表前であっても各自の学びを反省することは可能ではあるが、やはり自らの成績状況を見て考えさせられる部分は大きいからである。また成績発表から期日が経過しすぎると、当時の記憶や問題意識が薄れてしまうので反省自体が難しくなる。

しかし成績発表直後に実施する場合といえども、単位修得状況を踏まえ来学期に何を受講するか、履修計画を立てることに気が取られてしまい、個々の振り返り活動が表面的で浅いものになってし

まうリスクがある、実際、初年度に実施したときにはそのような学生が見受けられ、個々の内省やグループ活動が深まらなかったケースが散見された。次回から、履修計画を立てる時間を別途確保することでそうしたケースは減少したものの、今も完全になくなったわけではない。加えて、成績発表日とそれが教育学部の履修カルテシステムに反映される日とに数日程度のラグが存在するという問題がある。このときに履修カルテを用いた活動を実施しようとしても、当該期の学修状況が反映されていないために非常にやりづらい。最後に、この期間は夏休みや春休みといった長期休業にあたるため、活動に参加しない・参加できない者が出てくるリスクもある。これらすべての案件をクリアするベストな期日は存在しないと考えられるため、試行錯誤を繰り返しながら随時調整していく必要があるだろう。

## (2) 実施体制の問題

これは大きな反省点であるが、振り返り活動の内容や成果が専修内の教員で必ずしも共有されなかったという問題である。つまりワークシートに記入された事項に目を通し、それを学生指導に活用した教員と、ワークシートをまったく利用しない教員とに分かれてしまった。学生が提出したワークシートやバインダーは、教員が随時閲覧可能な状態にしていたとはいえ、そのことの周知が不足していた面は否定できない。学生がどのようなことに関心を持ち、悩み、どんな活動に打ち込んできて、何を成し遂げたと実感しているかなどに関する事項は、学生の人柄や資質・適性を知る上で貴重な情報源であると考えられる。ワークシートにはこうした情報が収録されているのだから、学生指導・相談業務に活用しないのは非常にもったいないといえよう。

では振り返り活動をもっと実効性の高いものにしていくために、今後どのような措置や体制づくりが必要であろうか。ここでは振り返り活動と教員面談とを有機的に結びつける実施方法・体制を提案したい。その概要を図2に示す。

そこでは、振り返り活動を事前作業と当日の作業、事後作業に分割し、さらにそれを教員との面談に繋げているのが特徴である。まず学期末に際し、教員は自らが保管していたバインダーを学生に返却し、次の活動で用いるワークシートを配布する。バインダーにはこれまでに使用したワークシートや成績表、印刷した履修カルテが綴じられており、過去の取り組み状況がどうであったか閲覧できるようになっている。学生は振り返り活動当日までに、配布されたワークシートに含まれているチェック項目（卒業後の進路、学業成績や学生生活、ジェネリックスキルの自己評価など）について自己評価した上で、当日の活動に用いる事項に自分の意見・考えなどを記入する。その上で

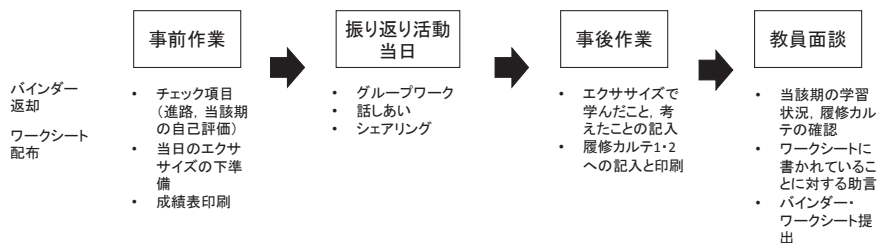


図2 振り返り活動と教員面談の流れ

当該期の成績表を印刷し、ワークシートと一緒にバインダーに綴じ込んでおく。

振り返り活動当日は、グループワークや話しあいが主であり、学生はそこで他者の考えや意見、状況を知るとともに、自分の意見や考えに対する他者からのフィードバックを受けることになる。このような活動は、普段友人と雑談ばかりで深い内容についてあまり話さない学生や、内省が浅く自分自身とあまり向き合えていない学生にとっては大きな刺激となるようである。

振り返り活動が終わった後、学生は事後作業としてそこで自分が学んだこと、感じたことだけでなく、改めて考えたことや意見が変わった部分などをワークシートに記入する。振り返り活動として体験したことの省察を行うわけであり、より一層自らと向き合い、自身の考えを深める格好の機会となる。それに加えて、履修カルテシステムに当該期の学修状況が反映された後、学生はカルテ1：履修履歴カード、カルテ2：教員としての資質能力自己評価カードに自己評価を記入し、紙に印刷してバインダーに綴じ込んでおく。

後日学生は指導教員とアポイントを取り、面談日を設定してもらおう。面談ではワークシートとそれらを綴じたバインダーを持参し、教員に提出する。教員はワークシートとバインダーを確認し、そこに書かれてある内容に基づいて、学生が頑張って取り組んでいること、これから挑戦しようとしていること、進路に対する構想・考えなどについて、学生の話に耳を傾ける。なかには自己評価が低く、自分自身を否定的に捉えやすい学生もいるので、共感的な態度と励ましを交えて話を聞くことが重要であろう。また学生の意見に対して「それは～～と関連する」「～～という見方もできるね」などといった意味づけを行ってフィードバックすることも、学生本人が自らの考えや意見を相対化し、受容していくのを促す働きをする。

これらの活動を繋げていくことで、学生にとってはその分自己と向き合い、省察する機会が増えることになり、より精緻で深い自己像や教育観、職業観の形成を促していくことが期待される。教員養成という点からは、早い時期から教育観について学生自身に考えさせ、深めさせる機会を定期的に設けることは、教員の資質能力としてあげられることの多い「愛情」「情熱」「使命感」の形成にとっても有益であろう。もちろんこれは一部の教員だけで実施できることではないため、他の教員にも振り返り活動の趣旨について理解を求め、協力して体制づくりを行っていかねばならない。

## 5. さいごに

本稿では、2011年度から心理学専修で每学期末に実施してきた振り返り活動について、その効用と課題の双方から論じてきた。自己省察は、教員に必要な資質能力として今後ますます重要視されていくに違いない。自己省察の力と態度を養うために、振り返り活動のより一層の内容工夫とそれが有機的・系統的に機能しうる体制づくりが必要である。

## 6. 引用文献

文部科学省 (2011). 国立の教員養成大学・学部 (教員養成課程) の平成23年3月卒業者の就職状況

文部科学省（2012）. 国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の平成24年3月卒業者の就職状況

文部科学省（2013）. 国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の平成25年3月卒業者の就職状況

文部科学省（2014）. 国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の平成26年3月卒業者の就職状況

文部科学省（2015）. 国立の教員養成大学・学部（教員養成課程）の平成27年3月卒業者の就職状況

Schein, E. H. (1990). *Career Anchors: Discovering Your Real Values (Revised Edition)*. University Associates. (金井寿宏 訳 (2003). *キャリア・アンカー—自分のほんとうの価値を発見しよう* 白桃書房)